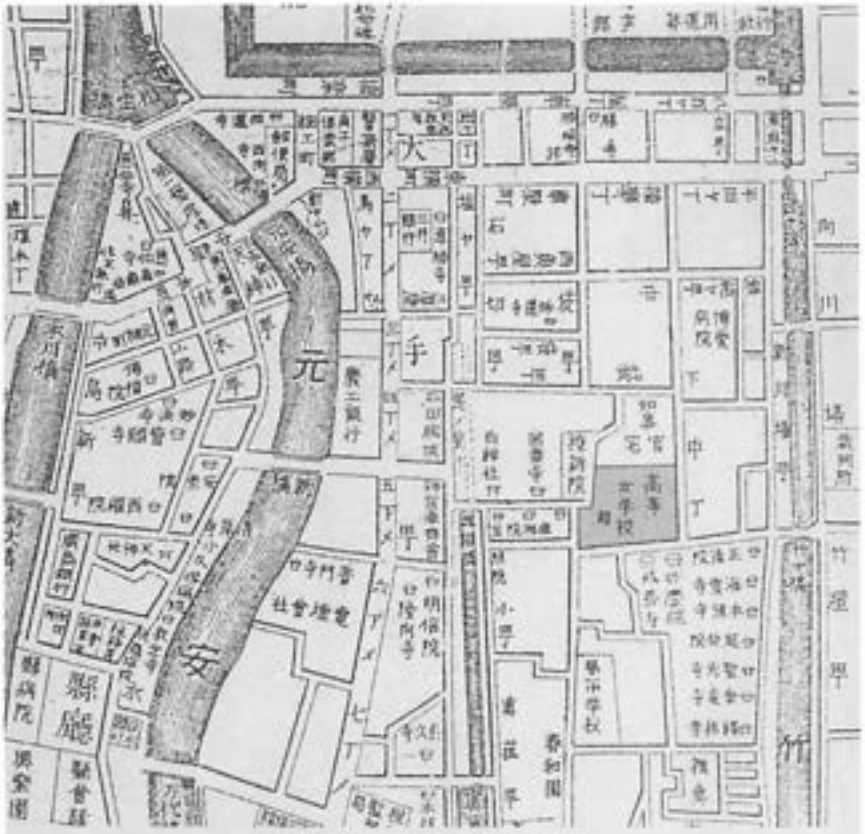
学び舎・庭園の記憶

皆実有朋アーカイブズ継承委員会

下中町県女時代

1．師範学校跡地に広島県立広島高等女学校設立



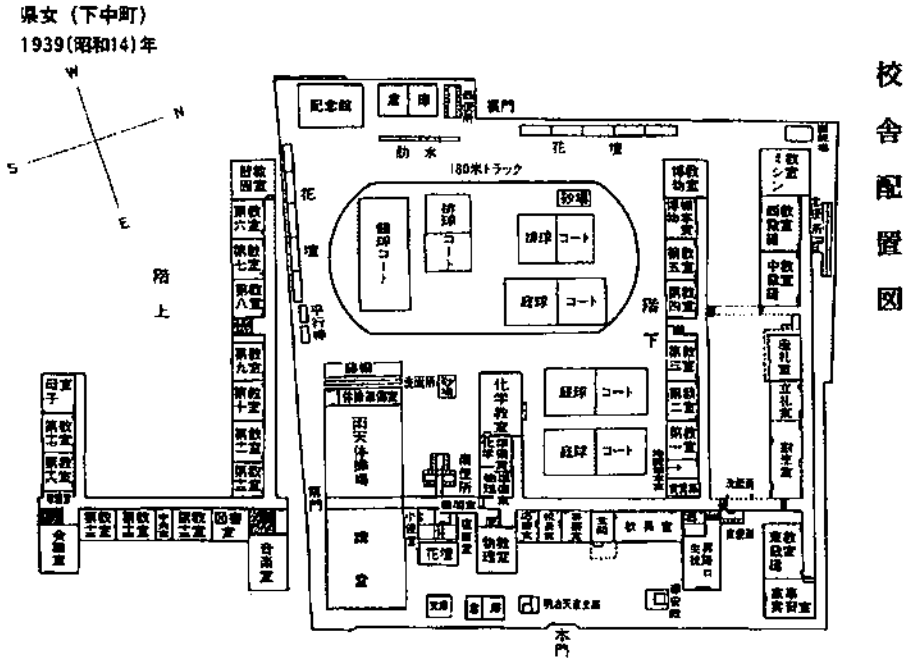
下中町付近　1909（明治42）年

明治 34（1901）年 12 月設立認可。広島県で初めての公立高等女学校誕生。校地の面積は 4 万坪余、後に 1567 坪を知事公舎として国に返還した。「学校は中町師範の跡なので植物園もあり広々としたものでした。後に植物園は知事、内務部長官官舎になりました。西側は道路をへだてて控訴院。法務官が法服を召した姿が校庭からみうけられました。」(有朋 1 期 - 倉知雪江)

2．校舎全景

校舎は段階を追って増改築された。まず大正 9 年に北側の裁縫教室や家事実習室の棟、翌年博物教室や普通教室の棟、すべて完成したのは大正 11 年。「校舎の北側に中庭があり、椿・金木犀等、四季折々に花の咲く木があった。初夏になると、背の高い泰山木に白い大輪の花が咲き、辺り一面に芳醇な香りがただよう。この中庭を挟んで今でいう家庭科の教室が並んでいた。」（有朋 38 期挟田菊枝）

3. 校舎配置図



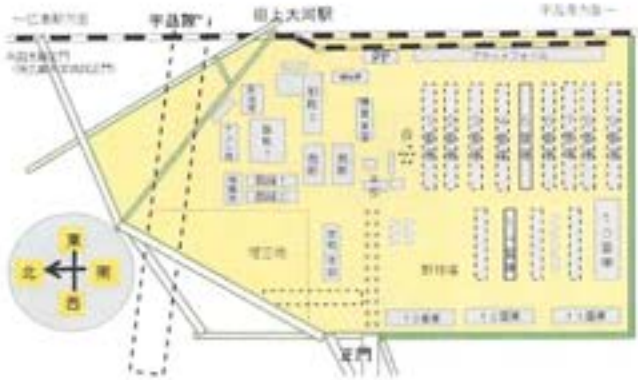
校地の西北にあった植物園も師範学校から受け継ぎ、明治38年から本格的に植物園を活用し始めた。学級ごとに生徒自身の手で草木を栽培させ、理科教育に役立て、また第4学年からは挿花の授業に役立てた。植物園には四季を通じて花々が咲き乱れ、青々とした松の木をはじめ、柳、ユーカリなどさまざまな木が植えられていた。池には鯉が悠々と泳ぎ、生徒たちにとってこの植物園は共に語らい、共にに歩き、心を癒す憩いの場所であった。大正13年に5年課程となり、新しく校舎が建設された。やむなく思い出多い植物園も惜しまれながらなくなった。

4．緑豊かな学舎

校庭の周囲には桜と萩が交互に植えられ、春は桜、秋は萩の花が咲き誇っていた。本館の前庭にも樹木がたくさん植えられ、「秋は名所として名高い前庭の萩の花がこぼれる」と言われたように、萩の花で有名でもあった。また、雨天体操場の西側には大きく立派な藤棚があった。藤棚に紫の花房が揺れて、涼しい葉影をつくっており、体育の後など、先を争って藤棚の下に駆け込み、水道の水を飲んだという。

5．被服支廠配置図と校舎

広島陸軍被服支廠跡



この図は、橋本秀夫氏作成の「広島陸軍被服支廠配置図」をもとに、作成したもの。４棟のレンガ倉庫と、木造の５番・14 番倉庫の２棟だけが残っていた。昭和 21 年４月、草津さくら寮、川内、八木と別れていた学校がやっと１か所にまとめられた。被服支廠の煉瓦倉庫を校舎とすることになったが、主に２階を教室として使用。採光も風通しも悪く、仕切りも急ごしらえで、隣の教室の声も筒抜け。隣のクラスの冗談に爆笑することもあったという。

6．被服支廠跡の庭園でクラス写真

被服支廠跡地に移転した2か月後の、昭和21年の6月に撮影。3年生になった宗像先生のクラス。まだ、モンペ姿も見える。校友会活動も再開され、2か月後には「第一県女新聞」創刊号も発行される。被服支廠跡地は草に覆われた原っぱではあったが、本館の他にも建物が残り、クスノキ(楠)や松並木、本館前の築山、庭園が残る、自然に恵まれた環境でもあった。

7．A校舎の周囲は原っぱ

昭和22年5月、被服支廠の木造14番倉庫を借り受けることになった。第一校舎、A校舎と呼んだ。本部を本館に、医務室を寄宿舎に、その北側が公舎であった。後に寄宿の前、本館の南側に作法室が造られた。このA校舎で、復興祭なども行っている。校庭は広く、丈の高い草に覆われた原っぱ。トロッコの線路の跡や建物の土台のコンクリートが残っていたりした。

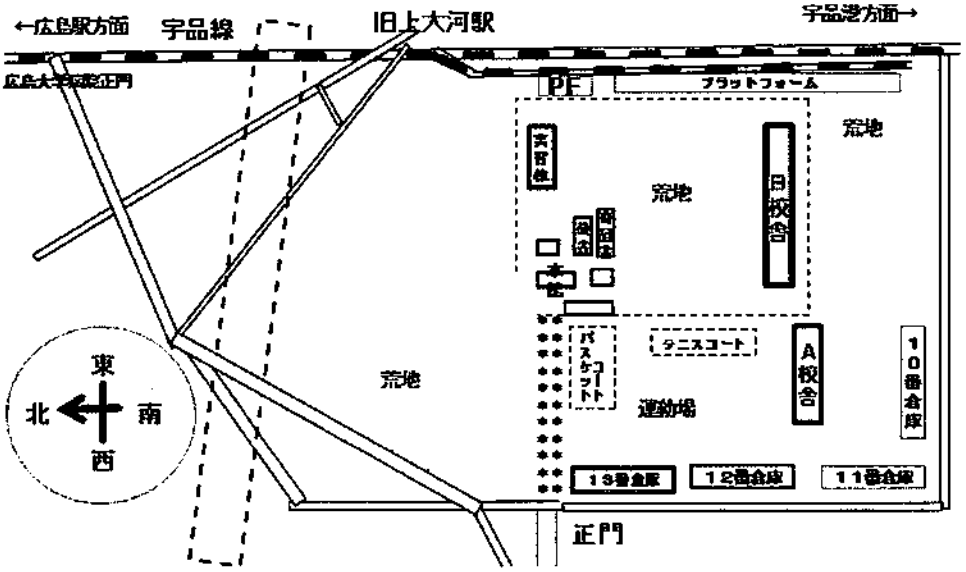
8．有朋高校はグループ制

木造校舎を改造した新第一校舎前で、黒川グループ

昭和23年4月第一県女はそのまま新制高校の有朋高校となった。クラスではなく、生徒が担任の先生を選ぶグループ制が採られていた。文科・理科・家庭科の必修時間以外に各自の能力、趣味による自由選択の時間が相当あった。「広島有朋新聞」は「個人の能力を最大限に伸ばす、個人中心の教育が行われる」と喜んでいる。土曜日、日曜日が休みの週5日制でもあり、自由研究などにあてられていた。

広島皆実高等学校＜１９４９年頃（昭和２４年頃）＞

昭和24年の総合制の皆実高等学校となる。A校舎、B校舎（旧5番倉庫）の木造建物、レンガ倉庫も使用された。B校舎は昭和２６年三分割して現在の皆実高校南端の位置に移築。昭和２４年生活科実習棟完成。



9・正門から本館への松並木

有朋高校の校地を引き継ぎ、男女共学・総合制の皆実高校がはじまる。正門から本館まで被服支廠時代からの松並木が続いていた。周囲との境に塀もなく、どこからどこまでが皆実高校なのか、だだっ広い3万坪の校地であった。その広い敷地には、ススキや雑草が生い茂るのどかな光景が広がっていた。

10. 原っぱも憩いの場

解体された被服支廠建物のコンクリートの土台が残る瓦礫の原っぱも、若者には憩いの場であった。校舎の南側の広い野原で、春になるとクローバーをはじめ草花が一斉に咲き始め、その東側には宇品線の列車が走るのを見ることができた。天気の良い日には男子も女子も、それぞれクローバーの上で弁当を広げ(時に早弁)、様々なことを語り合った。

11. 生活科家事室誕生

昭和24年12月落成の生活科家事室は、研究室、教室(試食室)、洗濯場、割烹室、準備室を備え、ユニット・キッチン、マントルピースが設置され、ガスと電気の設備が整えられた。この時期にこれほどの設備が備わっている学校はほとんどなかった。落成式には、生活科クラブの作った料理が並び、生活科の研究発表も行われた。この家事室は、昭和46年衛生看護科校舎の建設のため解体されるまで使われた。

12. 教室内に柱があるＢ校舎の前で５期生

まだ制服は決まっていない。昭和26年１月、被服支廠の木造倉庫だった建物を三つに分けて、今の皆実高校敷地の南端にあたる位置に移築。教室には太い柱が２本から４本あった。建物の端から端まで、100メートル走も十分できる長い廊下があった。昭和31年東半分を講堂兼体育館に改造し、西半分は南校舎と呼ばれることになった。その後解体され、昭和42年鉄筋３階建理科校舎となる。

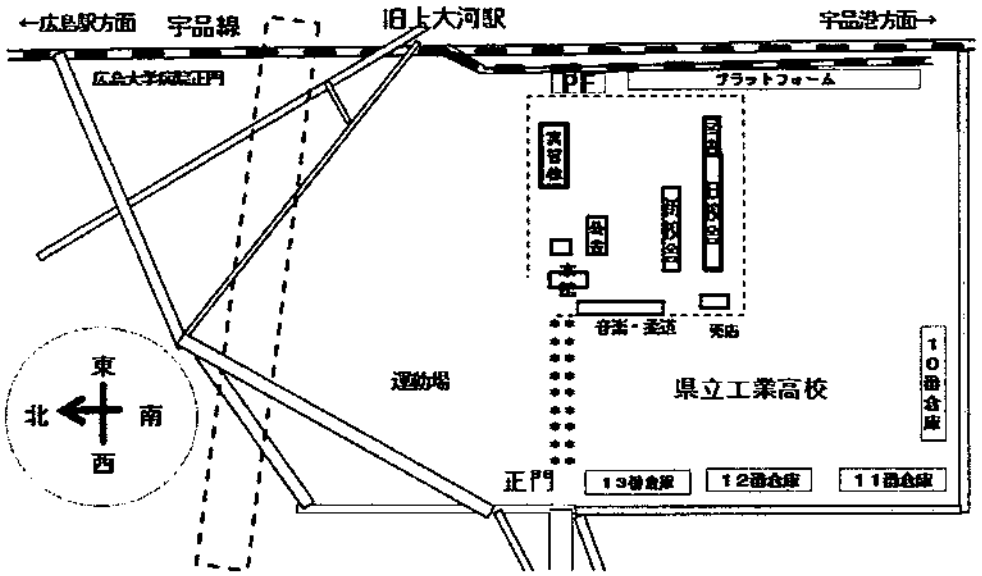
13. 新築の木造２階建てＣ校舎完成

昭和 26 年９月、千田町の工業部の生徒が入る予定の８教室を備えた新校舎が完成。

現在の県立工業高校の旧正門に近い、東寄りの位置にあった。工業部の分離独立問題が起こり、昭和 28 年４月単科制に移行した際、工業高校の本館として使用されることになった。

広島皆実高等学校＜１９５５年頃（昭和30年頃）＞

昭和３０年新校舎（中校舎）完成。このころから庭園整備が始まる。



14. 教室に柱のない校舎が完成

昭和30年6月、木造2階建の新校舎が完成。1階は被服・理科の教室と準備室。2階は被服室と社会科の教室と準備室であった。竣工後、皆実高校新聞は、中に太い柱のない教室を「七大不思議的名物の出現」と評し、「夢でなかった新校舎」と喜んでいる。この校舎は中校舎と呼ばれた。

左は3校舎　右は木造2階建の新校舎

15.　レトロな魅力の本館と築山

第一県女、有朋高校、皆実高校の本館として引き継がれた。鉄筋3階建ての本館(1号館)が建てられることになり、昭和39年5月、少し北側に移築され、美術教室、書道教室に改造された。そうして、ついに昭和42年2月解体となる。築山も被服支廠の時代からあり、植栽は少しずつ変わったが、平成11年50期卒業生の記念庭園「千載園」と命名され、現在に至る。

16. 校門が決まる前の通学路

皆実町側に面していた校門から、まっすぐ本館への道。どこからでも入れる田園的雰囲気で、解放感が心地よく、第４代木村二郎校長の作られた皆実の校風に通じるものを感じていた。

校舎の周囲に記念庭園の整備が始まる

17. 趣のある図書館完成と「南風園」

昭和31年9月柔道場と音楽室の間の壁を取り、図書館が完成した。室内は新しい机や椅子・ソファーが整えられ、窓からは自然の気配が感じられた。この頃から、校内緑化に力が入れられるようになり、図書館の周囲には6期生･7期生･8期生の卒業記念の庭園が造られ、「南風園」と名付けられた。つる薔薇のアーチと木製の白い柵で囲まれ、図書館が昭和44年特活校舎の3階に移転した後も、専攻科の校舎として親しまれた。つる薔薇のアーチは現在も健在。

18. 11 期生卒業記念「恵水園」

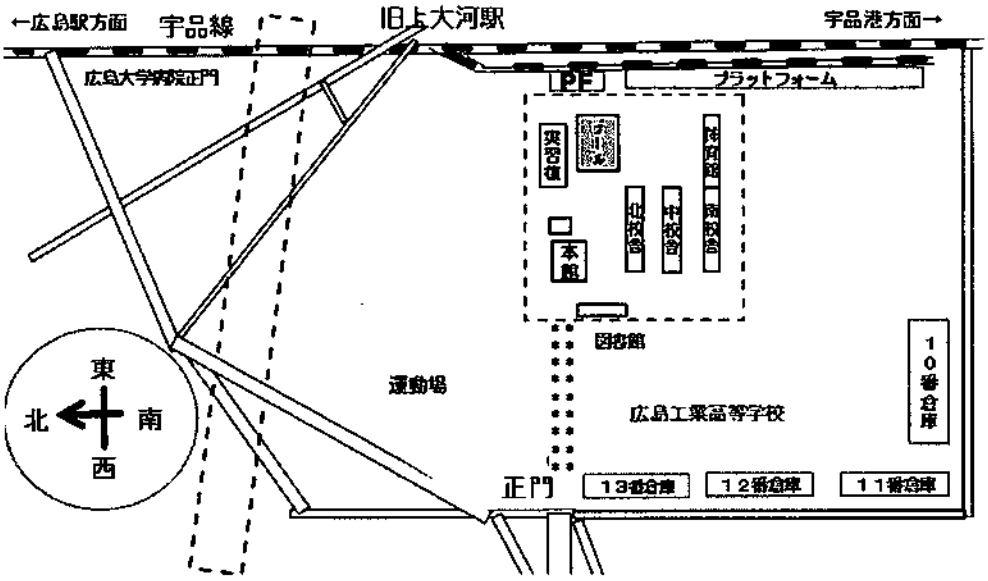
図書館の北側の小さな池の傍に小便小僧の像が立てられた。この庭園は 11 期生の卒業記念庭園となり、「恵水園」と命名された。この名前には、灼熱の中で水を求めて亡くなった、無数の被爆者に対する鎮魂の祈りがこめられていた。現在その標石が、「憩の森」の、県女の校門だった三本の柱の傍にある。

19.　開放廊下のある鉄筋３階建ての北校舎

昭和 33 年 2 月に完成した校舎は、南側に開放廊下を配置した斬新な３階建の校舎だった。廊下の下には庭園や花壇がひろがり、手すりは外の庭と一体感があり、柔らかい感じがしていた。日向ぼっこ、休憩時間の語らい、合唱祭の練習など思い出の多い場所となった。設計意図の一つに、南を開放廊下にして生徒が集い、交流が生まれるようにという配慮があったと聞く。

広島皆実高等学校＜１９６０年頃（昭和３５年頃）＞

昭和３１年柔道場・音楽室を改造して図書館。昭和３３年に北校舎完成。昭和３５年待望のプール完成



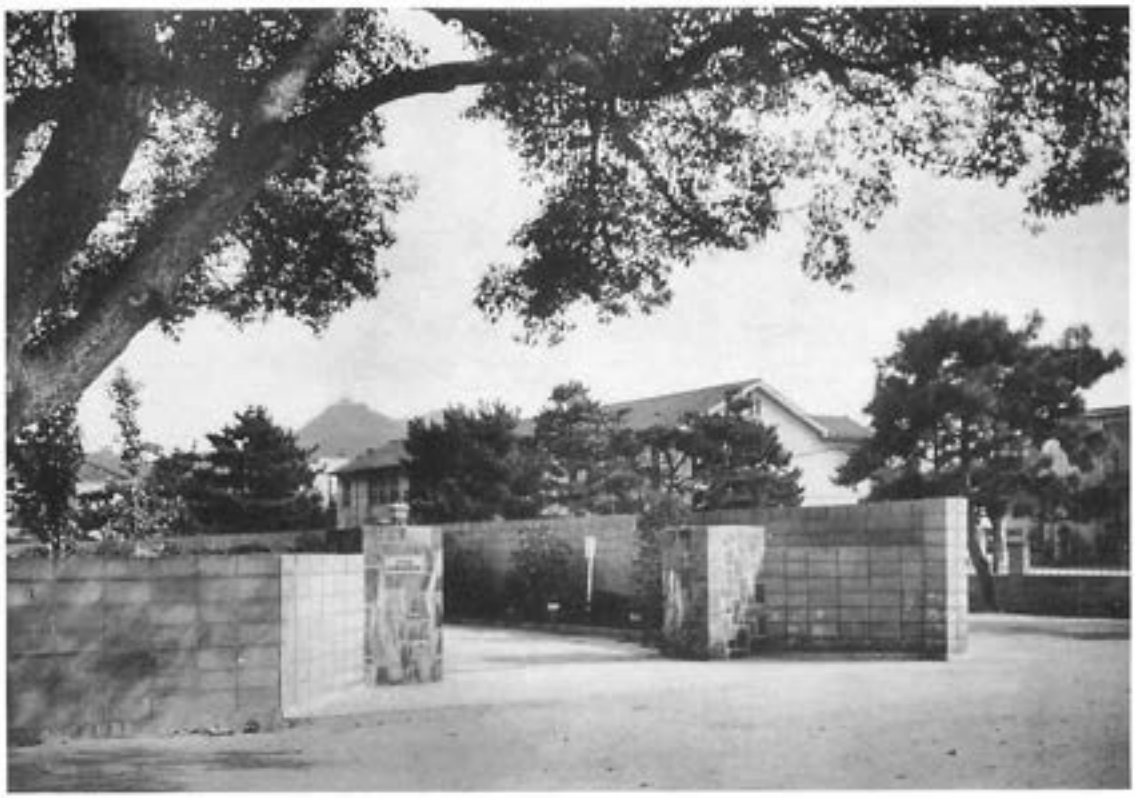
20. 北校舎と中校舎の間に庭園

北校舎が完成し中校舎との間の庭園整備が進んだ。渡り廊下の西側に、新校舎落成記念として、9期生の卒業記念「和敬園」が、翌年その西側に10期生の卒業記念「静寂園」が造られた。また、渡り廊下の東側には、ソテツを中心に八方向に低木が配され、
12期生の卒業記念「八鳳園」が造られた。中校舎が3号館と呼ばれ、鉄筋の校舎に建て替えた際、「和敬園」「静寂園」は、3号館側の半分が駐車スペースとなった。平成22年校舎の建て替えまで、三つの庭園は生徒たちの目を愉しませた。

21. 皆実有朋プールと青水園

昭和30年当時、市内五校で本校だけがプールを持っていなかった。皆実有朋同窓会は、皆実高校創立六十周年記念事業の一環としてプールの建設・寄贈を決定した。同窓会は「二葉あき子歌の集い」を開催し、プール建設に必要な目標額を達成することができた。昭和35年4月プールが完成し「皆実有朋プール」と名付けられた。
また、皆実15期卒業生によってプールの周囲に、記念樹ヒマラヤ杉、花木類が植えられ、「青水園」と命名された。しかし、昭和58年新体育館建設のためプールが撤去された際、「青水園」も消滅した。

22. 校門完成　銀樹園

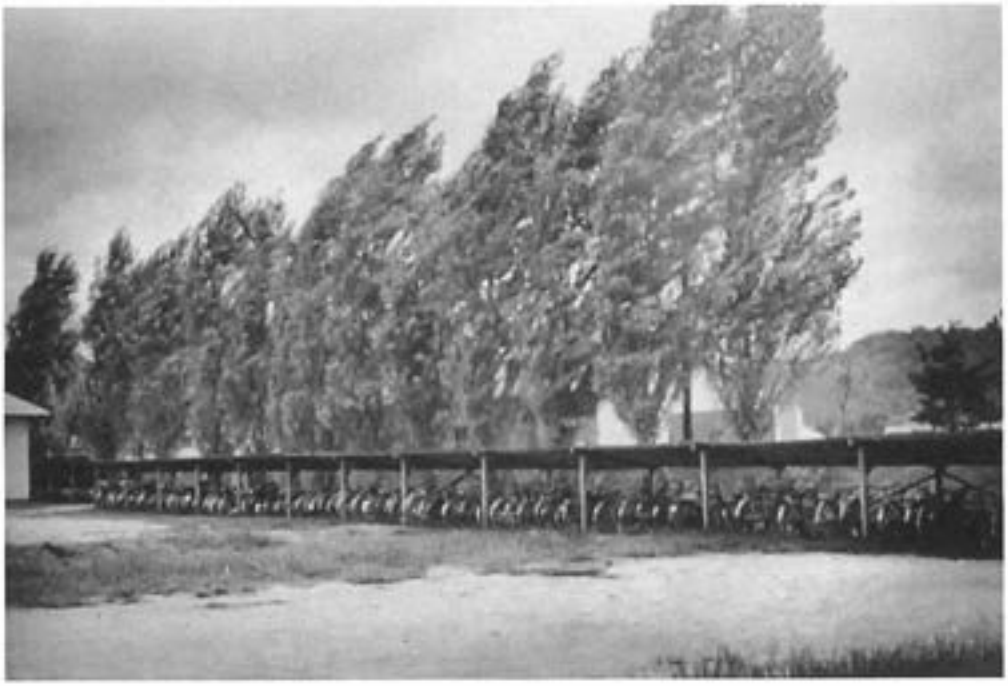


昭和36年3月皆実高校は現在の北グラウンドの使用が決まり、県工との境界も決まった。皆実町側にあった門から東に入った、県工との境に新しく校門が作られた。グラウンドと通学路の間にフェンスが建てられ、創立六十周年の記念として、フェンス沿いにイチョウ（銀杏）の木が植えられた。現在ある木の一部は14期の卒業記念庭園「銀樹園」の名残だろうか。他にも花木が植えられていったが、自転車置き場を増設する必要に迫られ、昭和55年この通路の両側が自転車置き場になり、現在に至る。

23. 正門からの通学路にも庭園

昭和36年5月校門が決まり、グラウンド南側の新しい通学路の最も奥、フェンス沿いではない側に、高く土を盛られ、正門に至るまでソテツ（蘇鉄）やツゲ（柘植）が植えられた。現在も東半分が新しい正門の脇、自転車置き場の東側では青々と葉を茂らせている。

24. 懐かしいポプラ並木



台風で倒れてしまい、思い出の中にだけあるポプラ並木。16 期生の在学中は自転車置き場にもなっていたようだ。高校時代を「セーラー服とポプラ並木の青春」、「通学・通勤途上、まず目に入るのが校庭の塀に沿って聳え立つポプラ」と、「通学路の中央に枝を四方に伸ばしている楠の大樹」と、懐かしむ声は多い。

25. 本館　東から見た校舎群

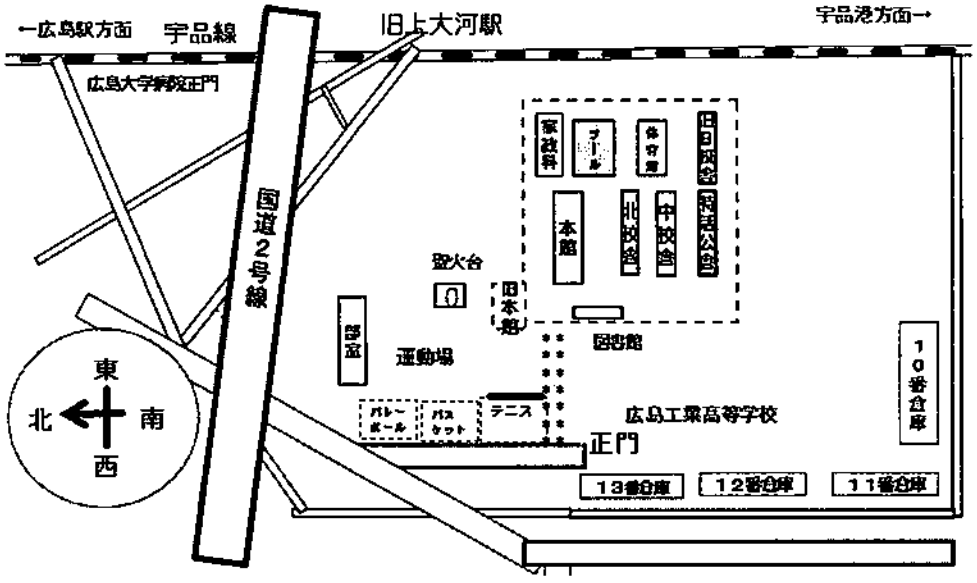
昭和38年、本館の東側に鉄筋3階建て校舎6教室(本館)が完成した。昭和39年5月、木造の旧本館を北側に移築し、書道教室、美術教室として使用。そこに新しい本館部分、昭和40年10月に6教室の東側に3教室を増築して本館が完成する（1～5号館の呼び名になったのは昭和47年月4月)。もう1枚の写真は、東から校舎の並びを撮ったもの。左から講堂兼体育館（南校舎)、中校舎、北校舎、本館。

26. 1号館・3年生校舎南側も庭園整備

校舎新築記念に1号館2号館との間に16期の卒業記念庭園「池塘園」が造られた。ユリノキ・ヒマラヤ杉などが中心で、その後21期生も池塘園の東半分に記念の植樹を続けた。3年生の校舎の南庭で、卒業アルバムの写真撮影の場としてもよく登場する。
平成22年の新校舎建設までその姿をとどめた。

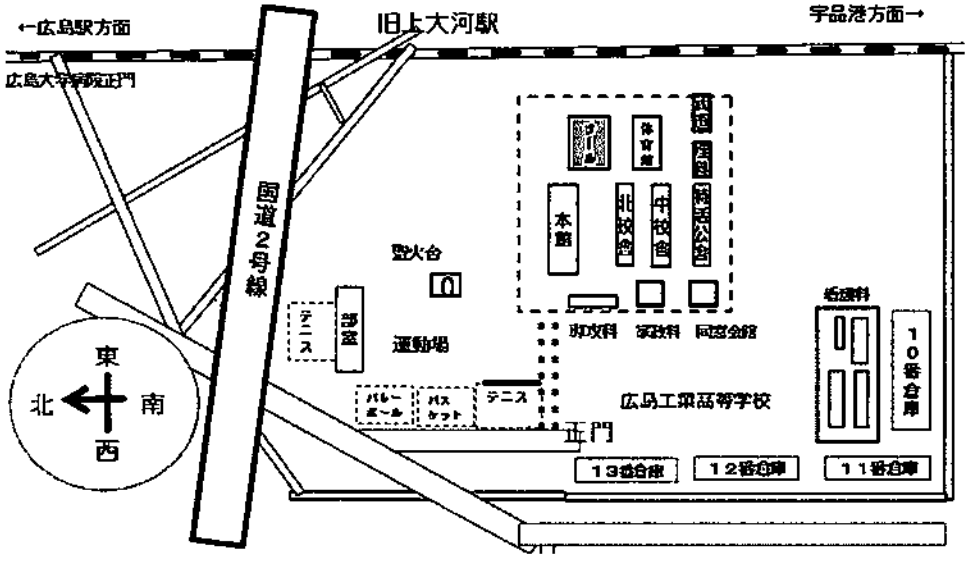
広島皆実高等学校＜1965年頃（昭和40年頃）＞

旧本館が移設された。昭和４０年本館・体育館・特活校舎完成。

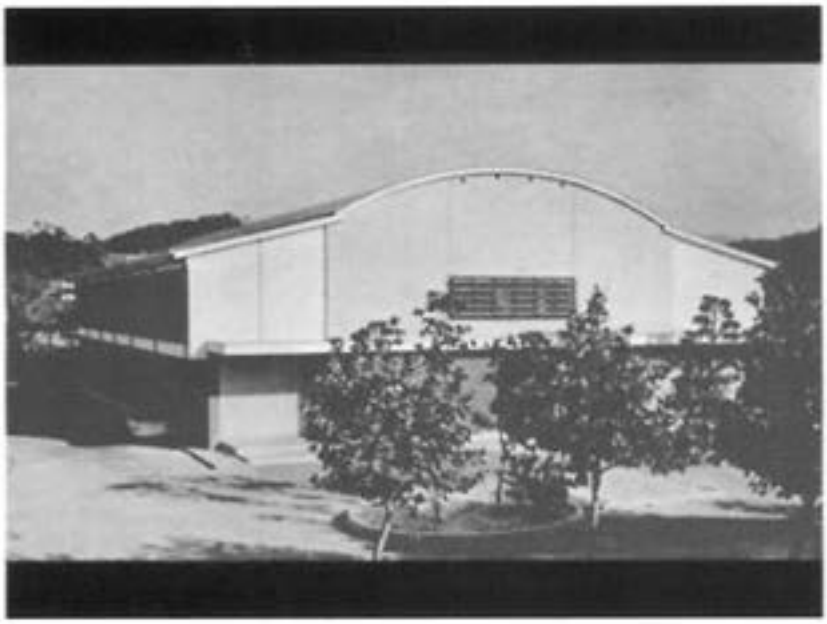


広島皆実高等学校＜1971年頃　（昭和46年頃）＞

昭和41年農林事務所を改廃し、看護科の仮校舎とする。　昭和42年理科棟・武道館建設
昭和44年専攻科は旧図書館を校舎とする。



27. カシワ (柏) の木と学而園



昭和 40 年 3 月新体育館がついに完成。(落成前であったが 16 期生の卒業式が行われた)。体育館前に 17 期生の卒業記念庭園が造られ、「学而園」と命名された。『論語』の学而篇から「学而時習之　不亦説乎」と刻まれている。その傍らには、校章にデザインされている柏の木も植えられ、現在 5 本の木が大きく育っている。その木は、学校に縁のある木をぜひ学校に植樹しようということになり、冠高原まで出かけ、山の若木を貰い受け、慎重に堀り採って学校に移植し、大切に育てられた木である。

28. 泉明園は創立九十周年記念の碑に

本館脇の池の傍らにシュロ（棕櫚）が植えられ、19 期生の卒業記念庭園「泉明園」と名付けられた。玄関に向かって左に「泉明園」と書かれた石碑が残っている。平成３年、創立九十周年の記念碑として皆実有朋会により再整備された。その後ハナミズキの木が両脇に植えられ、春・秋に目を愉しませてくれた。平成 22 年の校舎新築の際、取り払われ、一部が「憩いの森」に移設されている。

29. 「登高園」と「清朗園」

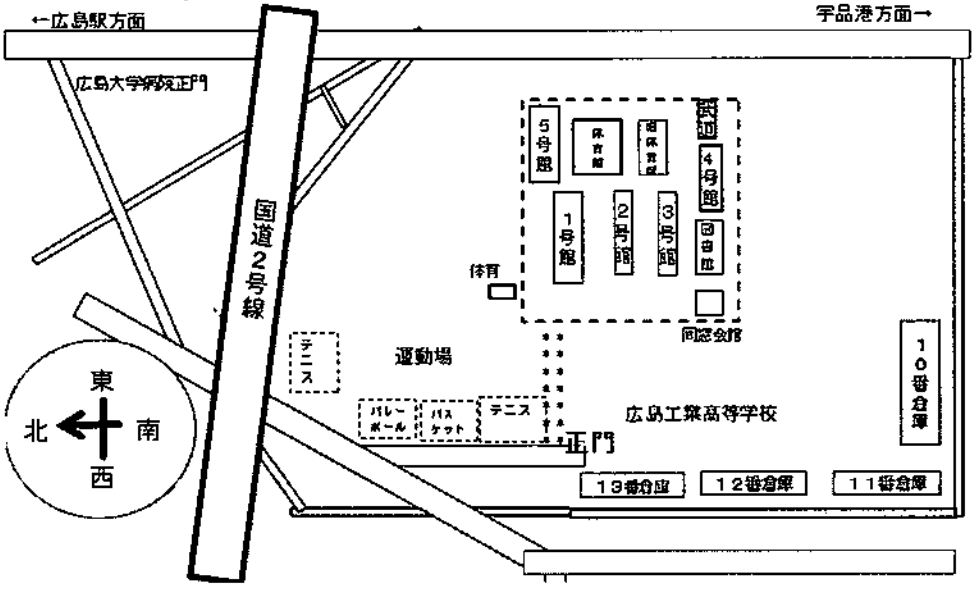
昭和 42 年、正門入口南側に 18 期生卒業記念「登高園」と命名され、ケヤキ（欅）の木を中心とした植樹がされた。昭和 44 年、本館前に 20 期生卒業記念庭園「清朗園」が造られた。現在は正門から「憩いの森」にかけての位置に石碑が残っている。

30.「いこいの森」

昭和 49 年流紋岩の正門が造られた。同じ年、第 8 代加藤朗一校長先生の発案で、図書館があった緑地に芝生の貼られた「いこいの森」が造られた。生徒が自由に楽しい語らいができる場所に、という意図であった。入口に県女の門柱を配置し、皆実有朋会館まで「思索の路」が整えられ、思い入れの深さを語っている。中央には 25 期卒業記念として一枚岩の巨岩「臥牛石」がどっかりと座っている。集められた他の年度の記念樹と一緒に、後輩の成長を温かく見守っている。創立 110 周年の記念に植樹がされ、「憩いの森」とされた。

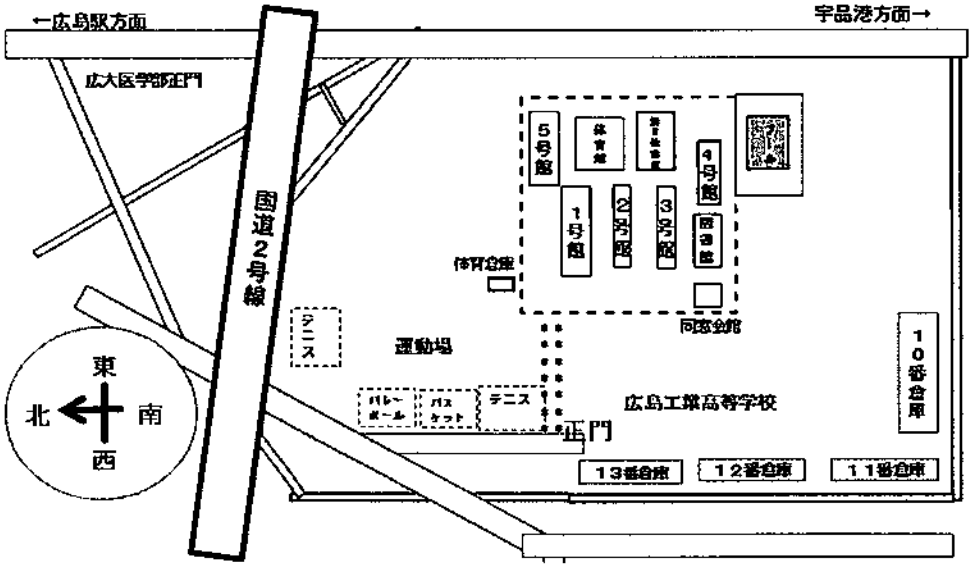
広島皆実高等学校＜1985年頃（昭和60年頃）＞

昭和47年看護棟（5号館）完成。昭和58年プール撤去。昭和60年プール跡地に新体育館兼講堂竣工。



広島皆実高等学校＜2001年頃（平成13年頃）＞

平成4年体育科新設。第2体育館竣工



31.　正門外側にミレニアム園

正門の外側脇に、51 期生の卒業記念庭園「ミレニアム園」が造られた。また同じ頃、その「ミレニアム園」から楠の道に向かう通学路に沿って、ピンク、白のハナミズキを交互に植え、その下にツツジ（躑躅）と、ユキヤナギ（雪柳）が植えられた。県立工業側の桜並木の桜が葉桜に変わると、皆実高校側のツツジとハナミズキが通学路に彩りを添えている。

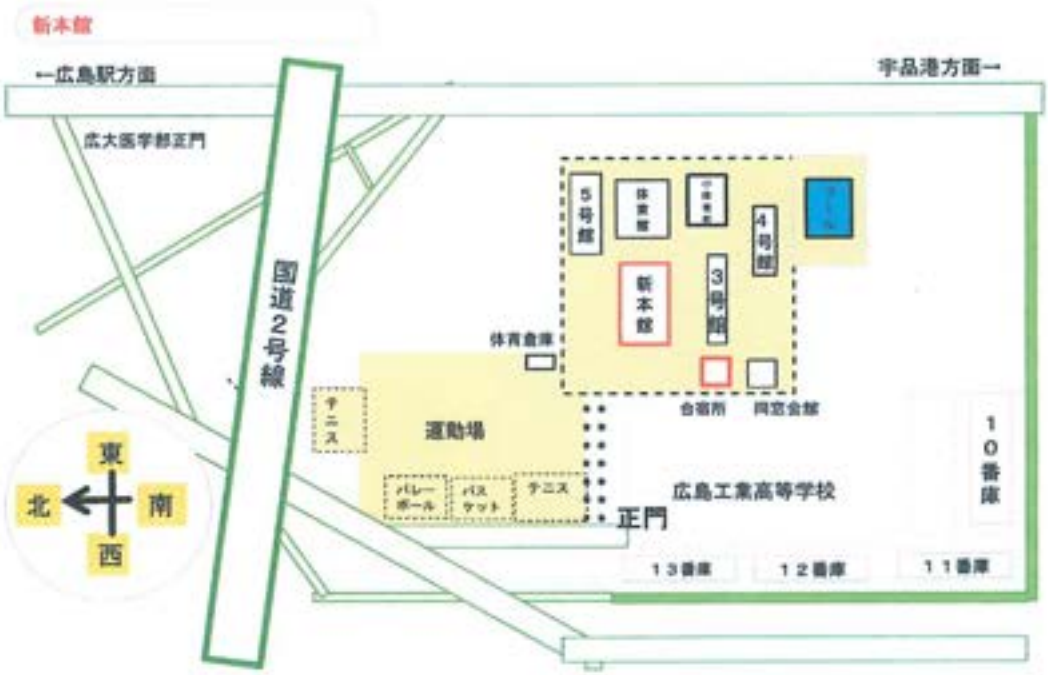
32. 樹齢二百余年のクスノキ（楠）にも伐採の危機が

被服支廠の時代より前から時代の変化を見守ってきたクスノキ（楠）。江戸時代末期の干拓工事で土盛りした土手に植えらえたものらしい。しかし昭和43年頃、この樹齢二百余年のクスノキ（楠）にも伐採の危機があった。皆実高校と工業高校の共有道路を舗装することになり、「車の通行の妨げになるので楠を伐採する」という計画が、工業高校の方から出された。皆実高校の校長先生に意見を求められた渡辺増富先生（長年緑化担当だった）は、即座に「伐採には絶対反対だと主張してください」と言われた。その結果、幹の周囲を一定の範囲で未舗装のまま残して（その範囲も再度狭められたが）現在至る。皆実高校の想い出を語る時、「大き楠」は欠かせない。

33. ありがとう２号館

新校舎 本館

34.　2014 年の校舎配置図



現在の皆実高校付近航空写真

34. 2014年07校舍配置图

北
西
南
东
校门
校门
校门